

福井県埋蔵文化財調査報告 第162集

杉谷遺跡

— 一般県道清水麻生津線（県単）道路改良工事に伴う調査 —

2016

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、一般県道清水麻生津線道路改良工事に伴い、平成25年度に実施した杉谷遺跡発掘調査の成果をまとめた報告書です。

杉谷遺跡は福井市杉谷町の城山東麓から朝六川西岸にかけて展開し、過去の分布調査により、縄文時代から古代・中世にわたる遺跡として周知されています。今回の調査では旧浅水川水系に連なる自然の落ち込み地形を検出し、特に西岸部から炭などとともに土器が集中して出土しました。これは近くに集落が営まれており、集落で不要になった土器を捨てに来ていたのではないかと考えられます。

杉谷遺跡の存在は地元でも広く知られ、現地には遺跡の顕彰碑も立っていますが、発掘調査が実施されたのは今回が初めてです。実際に過去の分布調査の内容と範囲を裏付ける成果が得られたのは有意義な成果と言えるでしょう。

今後、本書の調査成果が広く公開・活用され、埋蔵文化財に対するご理解と、郷土の歴史に対する興味をより一層深める端緒となれば、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、地元の方々など多くの皆様方からあたたかいご支援とご協力を賜りましたことに対して、心より感謝申し上げます。

平成28年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 工 藤 俊 樹

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、一般県道清水麻生津線道路改良工事に伴い、平成25年度に実施した杉谷遺跡（福井県福井市杉谷町所在）発掘調査報告書である
- 2 杉谷遺跡の調査は福井土木事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、中森敏晴、北川遼が担当した。
- 3 発掘調査は、平成25年5月1日から平成25年6月30日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成26年4月1日から平成28年3月22日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集・作成は中森が担当し、赤澤徳明が第3章第3節1を、他を中森が執筆した。
- 5 杉谷遺跡に関する成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 挿図および土器観察表の作成は担当者がおこない、吉田桂子と望月麻佑がこれを補佐した。遺構・遺物写真撮影および図版作成は中森が担当した。
- 7 本書に掲載した調査区全体図は、福井土木事務所から株式会社サンワコンに委託して作成した。写真図版に使用した上空写真は航空測量時に撮影したものである。
- 8 写真図版・挿図・表の遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は座標北を用いた。X・Y座標値は国土方眼座標系第Ⅵ系（世界測地系）に基づく。
- 10 第1～3図の作成にあたっては、国土地理院5万分1地形図「福井」（平成16年5月1日発行）、同2万5千分1地形図「福井」（平成17年12月1日発行）、同2万5千分1土地条件図「福井」（平成16年5月1日発行）を一部改変して使用した。
- 11 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 発掘調査に際しては、下記の団体から協力を得た。
福井市杉谷町・今市町各自治会（敬称略）
- 13 発掘調査には地元の方々の参加・協力を得た。また、遺物整理作業は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺構と遺物	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 遺構	7
第3節 遺物	9
第4章 まとめ	14

写真図版目次

図版第1	遺跡 (1) 調査区遠景 (西より) (2) 調査区遠景 (東より)
図版第2	遺構 (1) 調査区全景 (北より) (2) 落ち込み東岸 (北より) (3) 落ち込み西岸 (北より)
図版第3	遺物 (土器)
図版第4	遺物 (土器・石器)

挿 図 目 次

第1図	杉谷遺跡調査区位置図	1
第2図	杉谷遺跡周辺地形図	3
第3図	杉谷遺跡と周辺の遺跡分布図	5
第4図	調査区全体図	8
第5図	土器実測図(1)	10
第6図	土器実測図(2)	11
第7図	土器・石器実測図	12

表 目 次

第1表	土器観察表	13
-----	-------	----

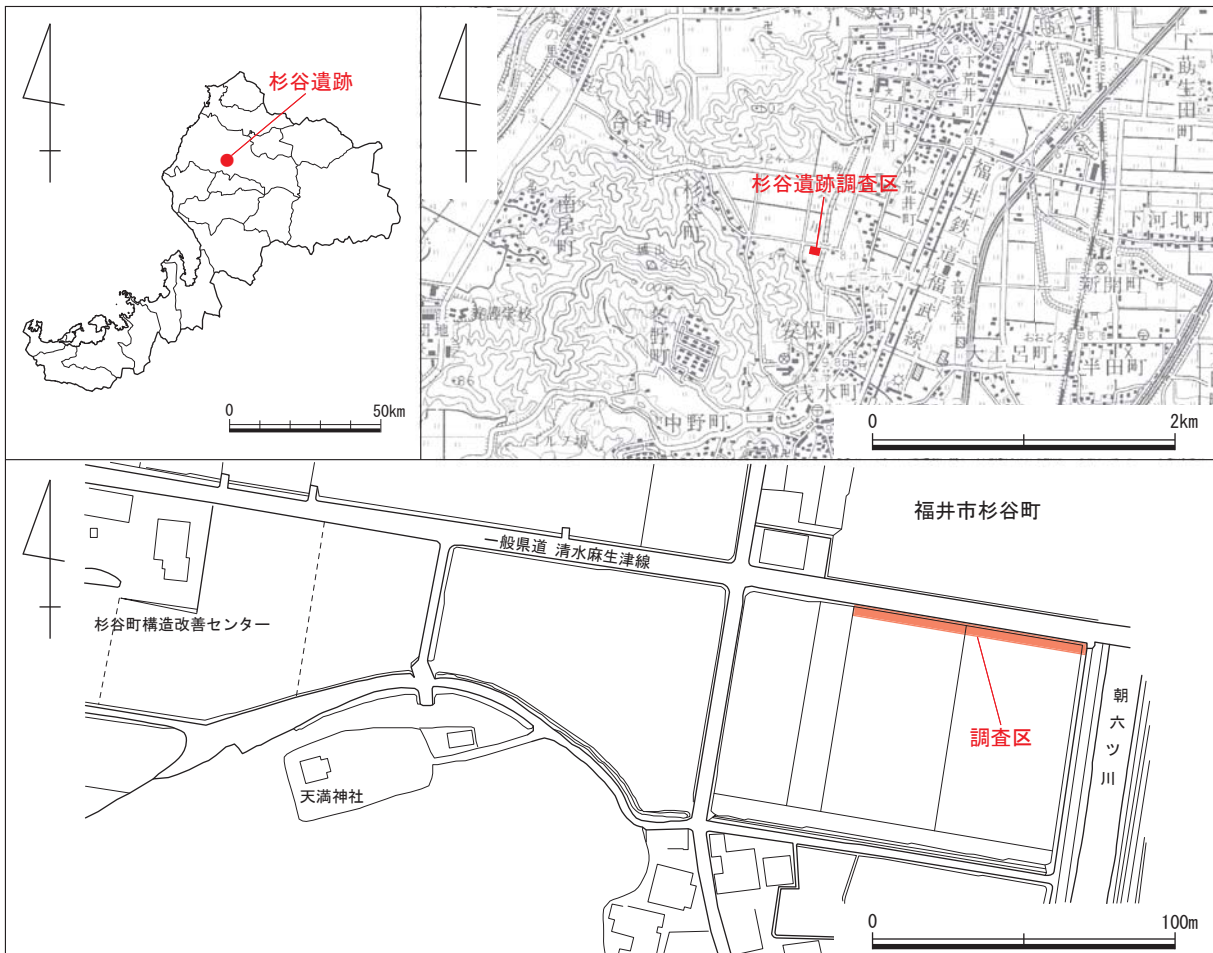
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯 (図版第1、第1図)

福井県道253号清水麻生津線^{しみずあそうず ふくいしかみてがちよう}は福井市上天下町^{いまいちちよう}を起点として同市今市町に至り、市南部を東西に横断する一般県道で、地域の生活幹線であると同時に、市南西部と一般国道8号や北陸自動車道を結ぶ最短路線としての重要な役割も担う道路である。しかし、市内を北流する日野川^{ひのがわ}を渡る橋が未だない上に、日野川西岸側は非常に整備が進んだものの、東岸側は旧来の隘路や右左折路が多く残るため、地元からは新橋架設と併せて、東岸側の線形改良が長らく要望されていた。一般県道清水麻生津線道路改良工事は、この東岸側の福井市杉谷町^{すぎたにちよう}から今市町にかけて実施される道路線形改良事業である。

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文)は福井土木事務所の依頼を受け、工事実施によって影響を受けるおそれのある複数の遺跡について、事後の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議資料を得ることを目的とする試掘調査を随時実施した。このうち、福井市杉谷町に展開する杉谷遺跡についても、平成24年(2012)に依頼(平成24年5月21日付け福土第5150号)を受けて試掘調査を実施し、弥生・平安時代に属する遺物を検出した。その結果、総面積270㎡(工事掘削幅約3.4m×延長約80m)について本格調査が必要となる旨を回答した(平成24年6月28日付け埋文第21-12号)。

この回答を受けて、福井土木事務所は福井県教育庁生涯学習・文化財課に本格調査を依頼し、県埋文も交えた協議の結果、平成25年度に調査対応することで合意し、調査計画が確定した。



第1図 杉谷遺跡調査区位置図 (上左：縮尺1/2,500,000、上右：縮尺1/50,000、下：縮尺1/2,500)

第2節 調査の経過 (図版第1・2)

調査は平成25年(2013)5月1日より開始し、同年6月30日に終了した。調査区の総面積は270㎡(東西約80m×南北約3.4m)を測る。調査区には一辺10mの方形グリッドを設定し、北から南方向にA～B、西から東方向に1～8の記号を付し、グリッド名とした。

以下、調査日誌を抄録する。

5月1日	現場事務所等設置開始。	6月6日	前夜のうちに3区南壁が広範囲に崩落、前日若干崩落した5区南壁と併せて土のうで補修する。3区南壁はブルーシートで覆い、降雨の影響を防ぐ。6・7区東西セクション実測。
5月9日	リース器材搬入。現場事務所等設置完了。	6月10日	3～7区を掘削。リース業者と打合せ、26日より撤収開始とする。
5月10日	公用車で発掘道具搬入。	6月11日	3・4・6～8区の南壁削り直し。5区底面掘り下げ。2～4区東西セクション実測。B3・6区の弥生土器出土状況写真撮影。
5月13日	現場作業開始。ベルトコンベア等器材設置。	6月12日	空中測量・写真撮影に備え、調査区清掃。東西セクション実測完了。調査区南北セクション実測。
5月14日	排水溝掘削、調査区南壁削り。弥生土器・土師器・須恵器など出土。	6月13日	調査区清掃。崩落部土のうで補強。南北セクション実測完了。
5月15日	排水溝掘削、調査区南壁を削る。	6月17日	空中測量。終了後、調査区全景・A7区落ち込み肩部・A3区落ち込み肩部の写真撮影。
5月16日	試掘報告に基づき、包含層2種について、黄褐色土をI層、灰色土をII層とする。7・8区より包含層(I層)掘削開始。	6月18日	高所作業車にて調査区全景・A3区落ち込み肩部・遠景の写真撮影。
5月20日	5～8区で包含層掘削。	6月21日	18日からの雨で、調査区横の県道擁壁が沈下、アスファルト舗装との隙間が一層広がる。福井土木に対応を要請、大型土のうで擁壁を押さえるため、調査区から器材・発掘道具一切を撤収。3区を追加掘削し、遺物を回収。
5月21日	5～8区で包含層掘削。8区で遺物集中検出。	6月24日	器材と発掘道具を洗浄。事務所および敷地を清掃、洗浄。
5月22日	1～4区で包含層掘削、排水溝掘り増し。A3区排水溝掘削中、弥生土器1個体分出土。	6月25日	公用車で発掘道具搬出。
5月23日	1～5区で包含層掘削。地表下90～100cmを遺構面と想定し、掘削を止める。	6月26日	プレハブ内装解体、備品撤収。電気・水道・電話各設備撤去。現場リース器材撤収。
5月27日	全面遺構精査。3～8区間に落ち込みあり。B1区調査区東西セクション実測。	6月27日	プレハブ解体開始。
5月28日	3区で落ち込み肩部掘削し、甕1個体など出土。3～6区の底面検出。7～8区の落ち込み肩部掘削。1区東西セクション実測完了。	6月28日	プレハブ解体・撤去完了。現場作業終了。
5月31日	前日・前々日の降雨による調査区壁面各所が崩落、土のう等で補修する。さらに安全のため、1区道路側の排水溝を埋め戻す。		
6月3日	3区の落ち込み肩部確定。北東-南西方向に緩やかに下降するが、試掘坑で途切れる。4・5区でそれぞれ東西方向にトレンチを設定、底面を探す。西方に下降している模様。		
6月4日	8区の落ち込み肩部、6・7区の底面ほぼ確定する。		
6月5日	6・7区で全面掘り下げ、排水溝再度切り直し。		

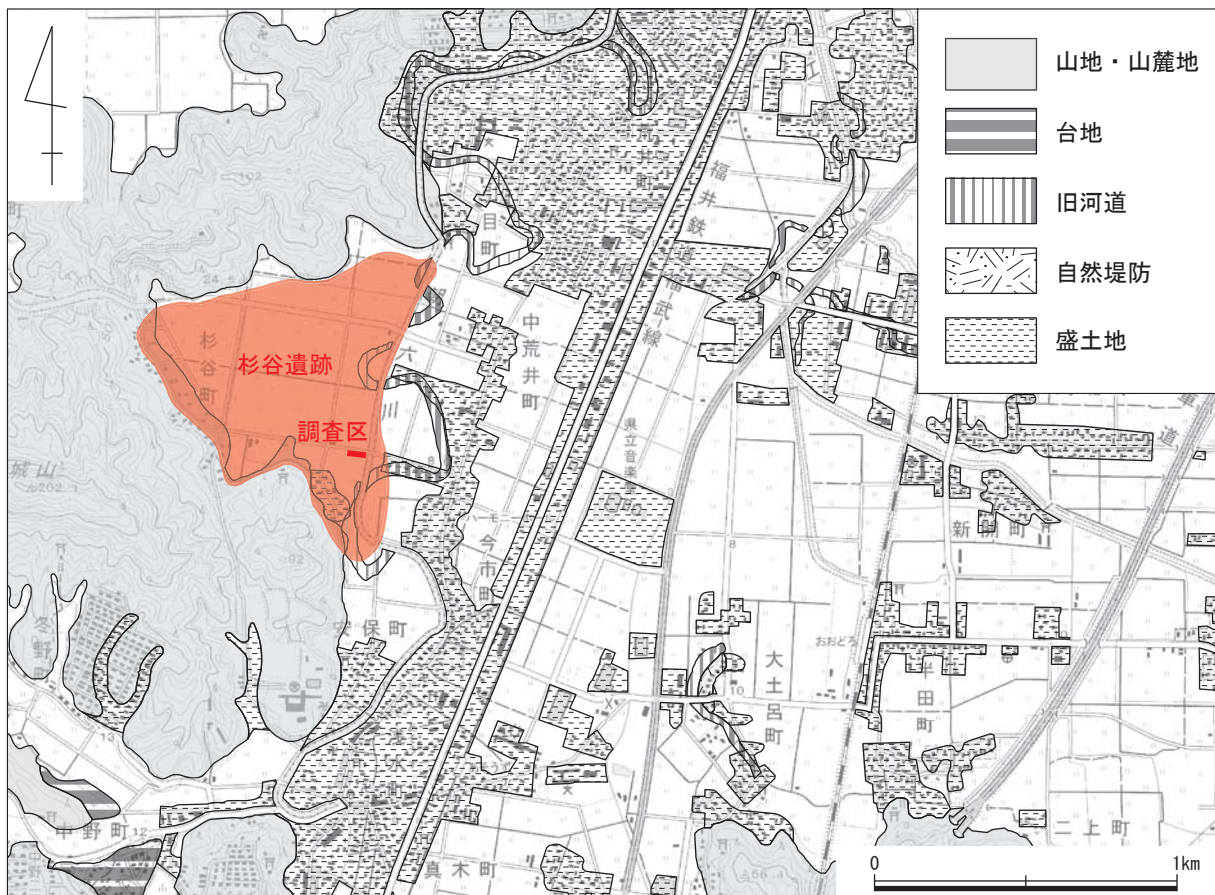
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境 (図版第1、第2図)

福井県は古代の越前・若狭両国から構成され、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がる付近に位置する。現在では敦賀市の東方、木ノ芽山嶺を境に以北を嶺北、以南を嶺南と呼び、行政的にも大別される。嶺北地方は越前国から現在の敦賀市を除いた範囲にほぼ相当し、嶺南地方は古代の若狭国に現在の敦賀市を合わせた範囲に相当する。

嶺北地方に広大な水系を展開する九頭竜川と、その支流の中でも特に長大な日野川ならびに足羽川による相乗的な沖積作用で形成されたのが福井平野である。南北長約40km・東西幅約10~15kmを測る長大な平野であるが、地元では一般に文殊山―城山―三方丘陵の狭隘部以南を武生盆地、福井市北部を西流する九頭竜川以北を坂井平野、両者の中間部を福井平野と各々区別している。杉谷遺跡のある福井市杉谷町はこの狭義の福井平野南西部に位置し、東を朝六川、西を山地に挟まれ、林野と城山の東麓に営まれる集落のほかは水田が広がる農業地域である。

朝六川は大正期に改修された浅水川の旧流で、山地を北へ回り込むところで江端川に合流し、江端川は西流して日野川に合流する。改修以前は浅水町から下流域の蛇行がさらに激しく、加えて江戸期には藩主の鷹狩地として河岸の樹木の伐採を禁じたため、洪水のたびに氾濫し、湛水が長期にわたってしばしば北陸道の運行をも妨げるといふ水害常襲地であった。杉谷遺跡は朝六川左岸一帯の氾濫原から城山東麓の緩斜面にかけて展開している。



第2図 杉谷遺跡周辺地形図 (縮尺1/25,000)

第2節 歴史的環境 (第3図)

本節では杉谷遺跡周辺域の主要な遺跡のうち、特に近年の主要調査成果を記す。

今市遺跡 (第3図14) 福井市今市町いまいちちょうに所在する。平成5・9・11年(1993・1997・1999)に県埋文が、同6・7年(1994・1995)に福井市教育委員会が、同26年(2014)に福井市文化財保護センターが発掘調査を実施した。主要な成果として、平成5年の調査では弥生中期前葉の環濠集落と、弥生中期後葉および古墳前期の墳墓群を検出した。また、平成26年の調査では平安時代の集落と、9世紀以前に作られた古代官道の北陸道と推測される道路を検出した。

安保山古墳群 (第3図15) 福井市安保町あほちょうに所在する。昭和50年(1975)に安保山古墳群発掘調査団が福井県教育委員会の委託を受けて発掘調査を実施した。4世紀代に築造された前方後円墳2基・前方後方墳1基・円墳2基を含む古墳群を検出した。

大土呂遺跡 (第3図16) 福井市大土呂町おどろちょうに所在する。平成5年(1993)に県埋文が発掘調査を実施した。調査区の北側と南側で様相が異なり、北側は弥生時代終末から古墳時代初頭の、南側は奈良・平安時代の集落を検出した。

糞置遺跡 (第3図20) 福井市半田町・二上町ほんだちょう ふたがみちょうに所在する。昭和48・49年(1973・1974)に平安京調査会が福井県教育委員会の委託を受けて発掘調査を実施し、弥生・古墳時代の集落を検出した。その後、平成11・14～16・21年(1999・2002～2004・2009)に県埋文が発掘調査を実施した。主要な成果として、平成14～16年の調査では弥生中期と弥生後期～古墳前期の集落および墓域を検出した。遺構は多数の溝や自然流路が主で、墓としては方形周溝墓3基や土壙墓・木棺墓などがある。

太田山古墳群 (第3図23) 福井市帆谷町ほだにちょうに所在する。昭和49年(1974)に太田山古墳群発掘調査団が福井県教育委員会の委託を受けて発掘調査を実施し、方形台状墓2基と方形周溝墓8基を含む、弥生・古墳時代の墳墓群を検出した。

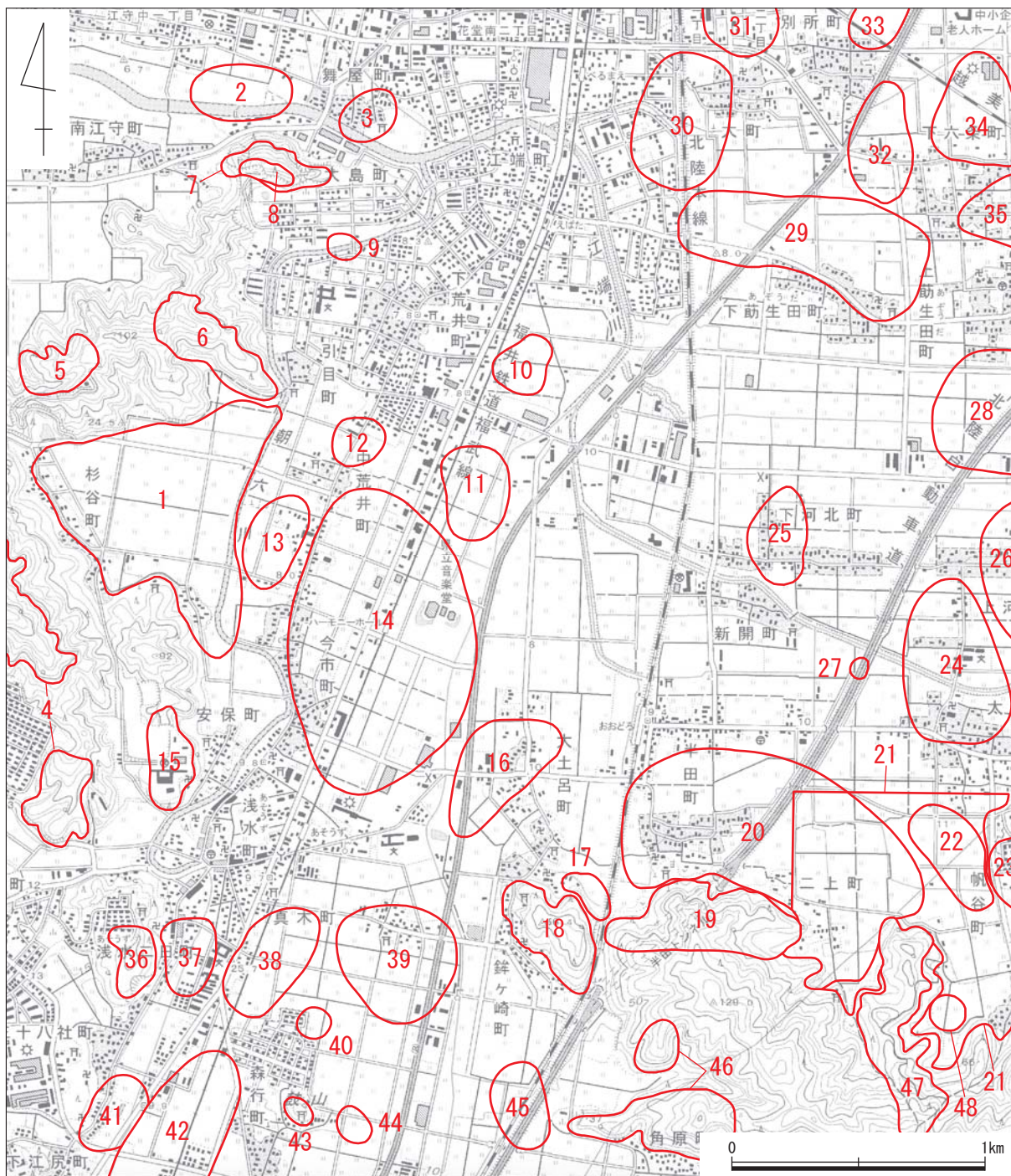
上助生田遺跡 (第3図28) 福井市上河北町・上助生田町かみこぎたちょう かみあぞうだちょうに所在する。昭和49・50年(1974・1975)に福井県教育委員会が、同55年(1980)に県埋文が発掘調査を実施した⁽¹⁾。主要な成果として、昭和49・50年の調査では、弥生時代の方形周溝墓7基、古墳時代の溝、奈良・平安時代の掘立柱建物6棟や井戸4基などを検出した。

下助生田遺跡 (第3図29) 福井市下助生田町しもあぞうだちょうに所在する。昭和56・57年・平成4年(1981・1982・1992)に県埋文が発掘調査を実施した⁽²⁾。主要な成果として、昭和56・57年の調査では、弥生時代の溝や土坑を検出した。

下六条遺跡 (第3図34) 福井市下六条町しもろくじょうちょうに所在する。昭和59年(1984)に県埋文が発掘調査を実施し⁽³⁾、律令期の掘立柱建物3棟や溝状遺構8条を検出した。

三十八社遺跡 (第3図41) 福井市三十八社町さんじゅうはっしやちょうに所在する。昭和39年(1964)に電話ケーブル埋設工事に伴い、不時発見された。昭和44年(1969)に帝塚山大学考古学研究室がトレンチ調査を実施し、縄文前期～後期の土器や石器、土偶など豊富な遺物が出土した。

鼓山古墳群 (第3図43) 福井市森行町・真木町もりゆきちょう まきちょうに所在する。昭和38年(1963)に福井市教育委員会が発掘調査を実施し、前方後円墳1基(1号墳)と円墳1基(2号墳)を検出した。築造時期はともに4世紀末から5世紀初頭に属し、豊富な副葬品を伴うが、特に1号墳から矢を入れる武具である布製黒漆塗の鞆2点が出土した。



No.	県番号	遺跡名	No.	県番号	遺跡名	No.	県番号	遺跡名	No.	県番号	遺跡名
1	01172	杉谷遺跡	13	01171	中荒井高畑遺跡	25	01188	下河北遺跡	37	01274	浅水二日町遺跡
2	01158	江守中遺跡	14	01172	今市遺跡	26	01189	上河北江原町遺跡	38	01275	真木遺跡
3	01159	舞屋遺跡	15	01176	安保山古墳群	27	01190	上河北藤之木遺跡	39	01276	主計中今村遺跡
4	01162	南居城	16	01177	大土呂遺跡	28	01191	上筋生田遺跡	40	01277	浅水二日町谷山遺跡
5	01163	南江守古墳群	17	01178	銚ヶ崎遺跡	29	01192	下筋生田遺跡	41	01278	三十八社遺跡
6	01164	引目古墳群	18	01179	銚ヶ崎古墳群	30	01193	下筋生田杉縄手遺跡	42	01279	森行遺跡
7	01165	大島遺跡	19	01180	二上・半田古墳群	31	01194	大町遺跡	43	01280	鼓山古墳群
8	01166	江守城	20	01181	糞置遺跡	32	01195	別所遺跡	44	01281	末広下町遺跡
9	01167	引目遺跡	21	01182	東大寺領糞置荘	33	01196	別所寺田遺跡	45	01283	角原壺文字遺跡
10	01168	下荒井遺跡	22	01183	帆谷遺跡	34	01197	下六条遺跡	46	01285	角原古墳群
11	01169	今市免鳥遺跡	23	01184	太田山古墳群	35	01198	天王金森遺跡	47	01295	二神古墳群
12	01170	中荒井堤下遺跡	24	01187	大田遺跡	36	01273	三十八社城	48	01296	帆谷谷田遺跡

第3図 杉谷遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）

註

- 1 昭和49・50年調査時は「上河北遺跡」と呼称したが、その後の調査の進捗により、遺跡範囲が上筋生田地籍にも拡大することが判明したため、遺跡名を「上筋生田遺跡」と変更した。
- 2 昭和56・57年調査時は「下筋生田畑田遺跡」、「下筋生田筆付遺跡」、「下筋生田高畔遺跡」の各遺跡に分かれていたが、その後の調査の進捗により、これら3遺跡は下筋生田地籍全域に展開する一連の遺跡であることが判明したため、遺跡範囲を統合し、遺跡名も「下筋生田遺跡」と変更した。
- 3 調査時は下六条遺跡の一部として「下六条西九反田遺跡」と報告している。

参考文献

- 青木豊昭 編『安保山古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告第1集 福井県教育委員会 1976年
- 青木豊昭「103 安保山古墳群」『福井県史 資料編13考古』福井県 1986年
- 赤澤徳明 編『下筋生田遺跡（下筋生田遺跡畑田地区）』福井県埋蔵文化財調査報告第22集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1994年
- 赤澤徳明 編『今市岩畑遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第34集 同 2008年
- 麻生津村誌編纂委員会『麻生津村誌』1979年
- 小葉田淳 監修『福井県の地名』日本歴史地名体系 第18巻 平凡社 1981年
- 堅田直「37 三十八社遺跡」『福井県史 資料編13 考古』福井県 1986年
- 河原純之・島田正彦・隼田嘉彦・松浦義則 責任編集『角川日本地名大辞典 18 福井県』角川書店 1989年
- 木下哲夫「35 上河北遺跡」『福井県史 資料編13考古』福井県 1986年
- 櫛部正典・田中勝之『今市遺跡（豆田地区Ⅱ）』福井県埋蔵文化財調査報告第57集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001年
- 斎藤優・青木豊昭 編『太田山古墳群』北陸自動車道関係遺跡調査報告書第8集 福井県教育委員会 1976年
- 斎藤優「102 太田山古墳群」『福井県史 資料編13 考古』福井県 1986年
- 清水孝之『今市遺跡（豆田地区）』福井県埋蔵文化財調査報告第42集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999年
- 鈴木篤英 編『糞置遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第56集 同 2001年
- 鈴木篤英 編『糞置遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第90集 同 2006年
- 田辺昭三・梅川光隆「58 糞置遺跡」『福井県史 資料編13考古』福井県 1986年
- 田辺昭三・梅川光隆「糞置遺跡」『福井市史 資料編1 考古』福井市 1990年
- 鼓山古墳発掘調査団 編『鼓山古墳発掘調査報告』福井市教育委員会 1965年
- 仁科章『上河北遺跡』北陸自動車道関係遺跡調査報告書第15集 福井県教育委員会 1979年
- 仁科章「57 上河北遺跡」『福井県史 資料編13考古』福井県 1986年
- 仁科章「79 上河北遺跡」『福井県史 資料編13考古』同 1986年
- 仁科章「上筋生田遺跡」『福井市史 資料編1 考古』福井市 1990年
- 沼弘『鼓山古墳出土の靱について』福井市立郷土歴史館 1965年
- 沼弘「福井市鼓山古墳出土靱についての考察」『考古福井 第1号』福井考古学研究会 1968年
- 沼弘「三十八社遺跡」『福井県における縄文式土器集成』同 1969年
- 沼弘「104 鼓山古墳」『福井県史 資料編13 考古』福井県 1986年
- 沼弘・白崎卓・渡辺貴美「安保山古墳群」『福井市史 資料編1 考古』福井市 1990年
- 沼弘・白崎卓・渡辺貴美「太田山墳墓群」『福井市史 資料編1 考古』同 1990年
- 沼弘・白崎卓・渡辺貴美「鼓山古墳群」『福井市史 資料編1 考古』同 1990年
- 野路昌嗣『糞置遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第152集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014年
- 福井県教育委員会『福井県遺跡地図』1993年
- 本多達哉 編『大土呂遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第30集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1995年
- 三澤繁忠 編『今市遺跡』福井県立音楽堂（仮称）周辺整備事業に伴う発掘調査概報書 福井市教育委員会 1996年
- 三澤繁忠「今市遺跡」『第30回 福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015年
- 南洋一郎「36 糞置遺跡」『福井県史 資料編13考古』福井県 1986年
- 南洋一郎「三十八社遺跡」『福井市史 資料編1 考古』福井市 1990年
- 山口充 編『六条・和田地区遺跡群』福井県埋蔵文化財調査報告第11集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1987年
- 山本亮 編『糞置荘・二上遺跡の調査研究』古代学協会研究報告第11輯 公益財団法人 古代学協会 2015年

第3章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要（図版第1・2、第4図）

1 地形と層序

杉谷遺跡は福井市南西部の城山東麓、朝六川の氾濫原一帯に立地し、縄文時代から古代にわたる複合集落遺跡として周知される。過去の分布調査では縄文土器を主体に土師器、須恵器、中世陶器などを採集しており、各時代集落の存在を推測し得る。調査前の状況および周辺の現況は水田である。

調査区は遺跡の南に位置し、杉谷集落の周縁部を巡るように通る県道清水麻生津線の南側拡張部分である。具体的には歩道新設部分であり、その形状は歩道の線形そのままに長方形を呈する。規模は東西長約80m、南北幅約3.4m、総面積270㎡を測る（第1・4図）。遺構検出面の標高は西から東へ7.60～7.45～7.55mを測り、中央に向かって少し落ち込む。

標準層序は以下の3層に大別できる。

I層：暗黄褐灰色粘質土。水田耕作土など表土直下に30～50cmほど堆積し、炭を含む。遺物包含層および遺構覆土である。弥生土器・土師器・須恵器などを含むが、量は少ない。

II層：暗灰色粘質土。遺構覆土で、土色以外の属性はI層に酷似する。

III層：黄褐灰色～灰色粘質土。基盤層、いわゆる地山層である。

I・II層の土色の違いは土中に含まれる鉄分の酸化・還元色の違いによるもので、基本的には同一層と考える。また、本遺跡の地勢が朝六川の氾濫原であることから、I・II層はともに流れ込みの可能性が高く、包含遺物も各層の所属時期を直ちに反映するものではないと推測する。

2 遺構検出状況

検出した遺構は自然の落ち込み地形で、調査区の東西両端部でその岸線を検出した。

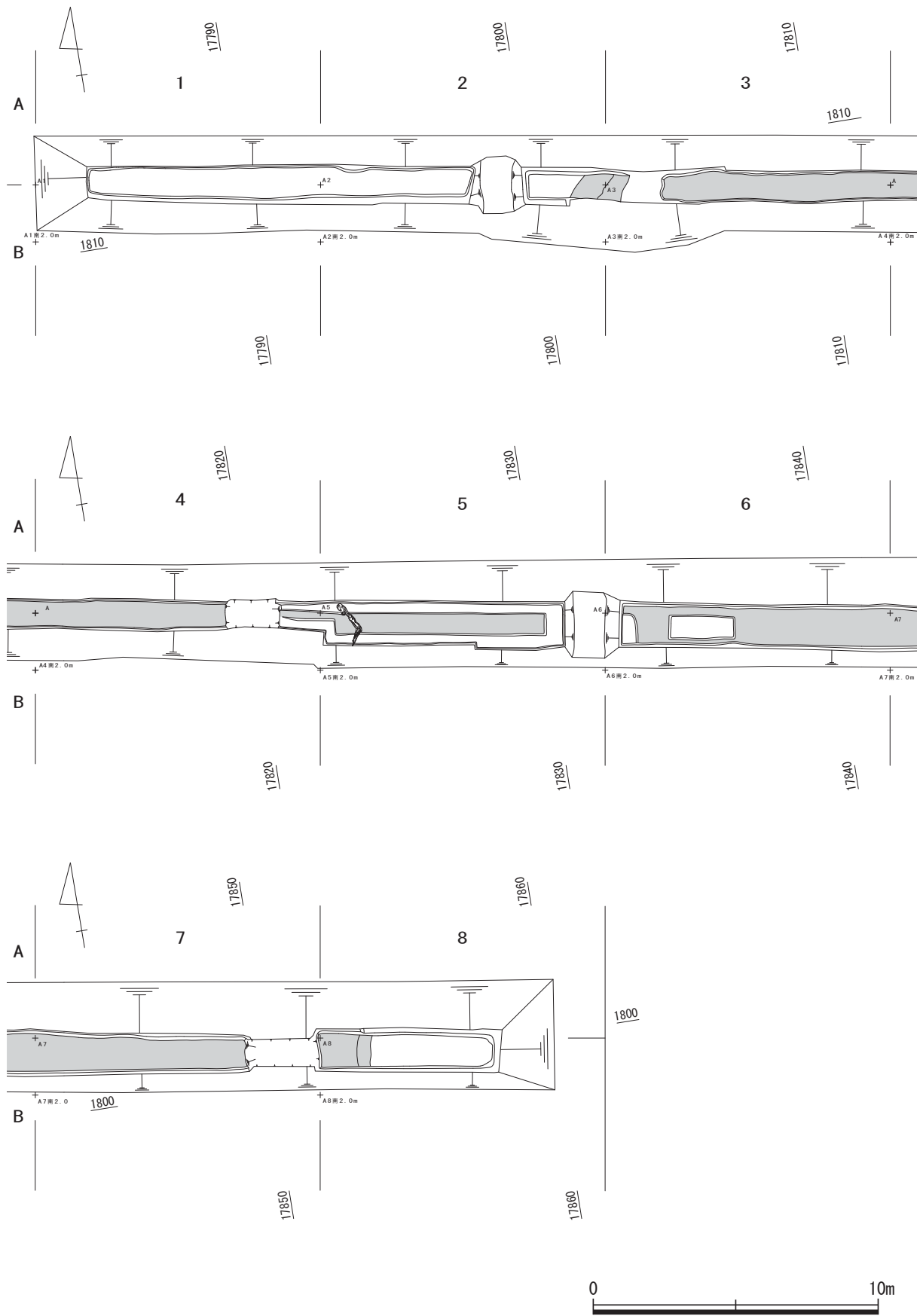
3 遺物出土状況

出土遺物は大型コンテナで3箱を数える。内容は縄文土器・古式土師器・須恵器などで古式土師器が主体をなす。石器は片刃石斧1点のみである。

第2節 遺構（図版第2、第4図）

検出した遺構は落ち込み地形1箇所のみである。規模に比して遺物量は非常に少なく、出土箇所も東西両岸の比較的浅い箇所集中する。この落ち込みは自然地形であって人の手によるものではないこと、調査区が県道の擁壁に隣接し、道路面と遺構検出面の比高差が1m近くあることを考慮して、調査区の掘削は必要最小限にとどめた。したがって、調査は落ち込みの両岸部を限定的に掘削して岸線を検出し、落ち込みの範囲と規模を確定させるとともに、出土遺物を可能な限り採集した。

落ち込み地形（第4図） A・B 2～8区にかけてのほぼ調査区全面で検出した（第4図網掛け部）。2区で西岸を、8区で東岸をそれぞれ確認し、その規模は東西長で20.1mを、深さは少なくとも0.5m以上を測る。遺物は東西両岸部で出土し、特に西岸部で一部炭化・黒化した土器や炭化物が集中して出土した。この遺物出土状況から推測して、落ち込みの近隣に集落が展開していた可能性が指摘できる。



第4図 調査区全体図（縮尺1/200）

第3節 遺物 (図版第3・4、第5～7図、第1表)

1 土器

今回の調査では集落などに直接関連する遺構は検出せず、出土遺物も落ち込み地形もしくは包含層出土品がほぼすべてである。したがって、遺構別ではなく、土器別に記述する。内容は古式土師器が主体を占め、縄文土器や須恵器を含む。本項では計44点を図示した。

1) 古式土師器

32点を図示した(第5・6図)。弥生時代後期以降の北陸南西部において甕や壺の主体を占める有段口縁を有するものが大半で、土器編年研究が進展している畿内では古墳時代初頭の庄内式に併行する白江式の範疇に含まれる。つまり、この後に畿内を中心として北陸地方の多くをも席卷する布留式甕が出現する直前の土器である。

甕(第5図1～9・13～15・18・21・22、第6図1・2) 有段口縁甕が12点(第5図1～9・13～15)、「く」の字口縁甕が1点(第6図1)、山陰系有段口縁甕(山陰では「二重口縁」と呼称する)が2点(第5図21、第6図2)で、いずれも口縁部もしくは胴部上半まで復元し得た。

第5図5～9・15は北陸系で一般的な15～18cm程度の口径を持つ有段口縁甕である。この一般的な口径については、第6図2など北陸でも一定量出土する山陰系の有段口縁甕についてもほぼ同じ状況と言える。ただ、これら一般的な口径のものを「中型」甕とすると、第5図3・4・13・14など、口径20cm前後かそれ以上の北陸系「大型」甕は、県内の同時期資料⁽¹⁾においてもその全体に占める比率が意外に少ない印象を受ける。なお、第5図1・2・21など北陸系・山陰系とも口径30cm以上の「特大」甕は、個体数こそ少ないが特に稀なものではない。

第6図1は口縁が大きく開く「く」の字口縁甕の頸部までの破片だが、過去の類例から見て、胴部が球形に近くなり、底部は自立しないほどに小さくなる類と推測する。布留式甕が出現する直前の白江式に多く見られるものである。

第5図18は中型甕の、同図22は特大甕の底部で、いずれもわずかに上げ底である。

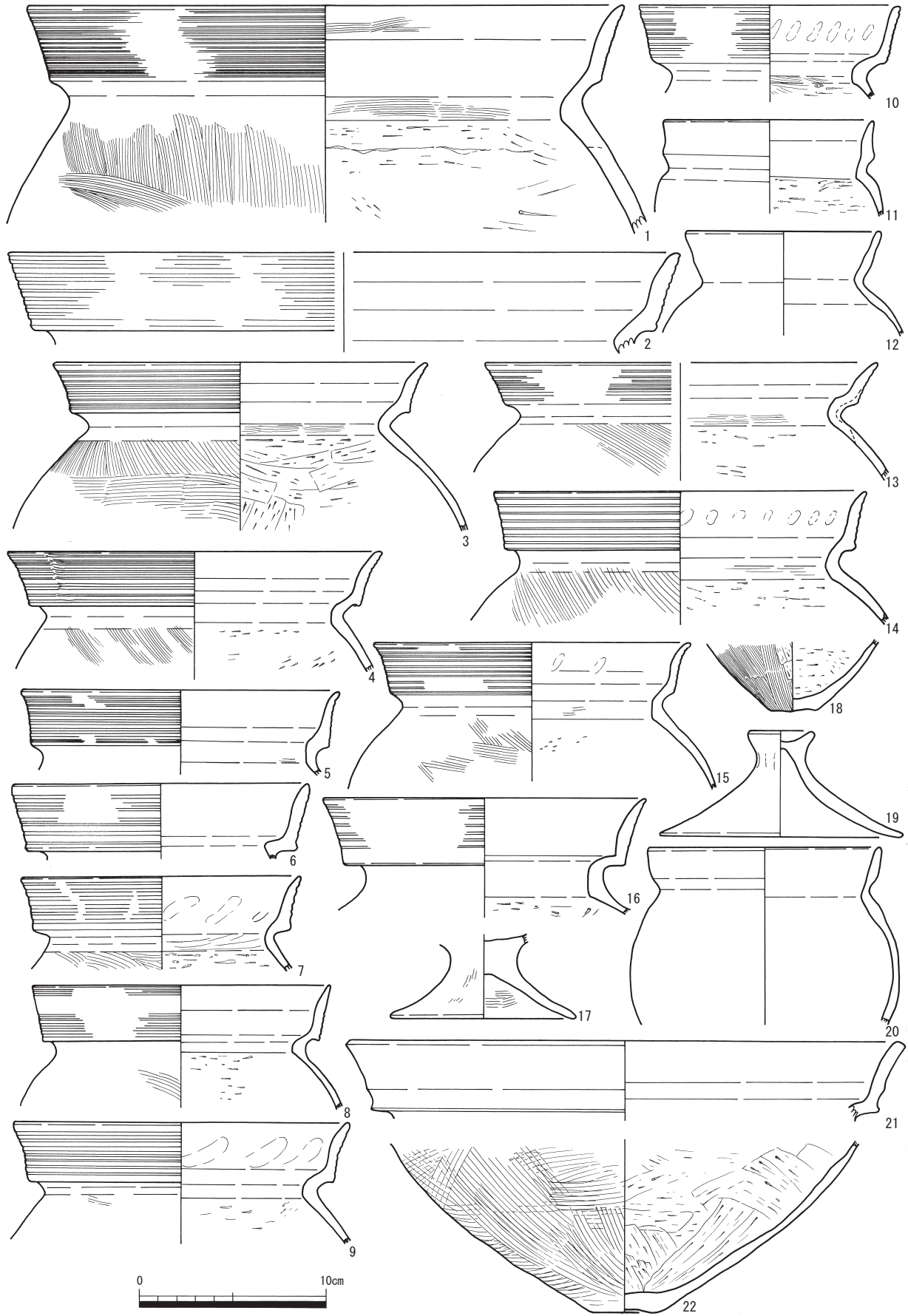
壺(第5図10・12・16・17、第6図3) 第5図10・16は有段口縁壺、同図12は短頸壺である。10は頸部に平坦面を設け、わずかだが外面からも頸部が明瞭で、甕よりもさらに大きく胴部が張って丸みのある器形となる。12は短い口縁が斜めに立ち上がる短頸壺で、形体に大きな特徴がないが、おそらく卵形の長胴となるものと推測する。

なお、過去に指摘した⁽²⁾ように、頸部までの破片でこれまで甕と器種認定してきた資料の中には、脚台の付く「台付壺」となるものも含まれる可能性が高く、特に第5図16はその口縁と見られる。同図17はその脚台と見られるが、鉢の脚台の可能性もある。

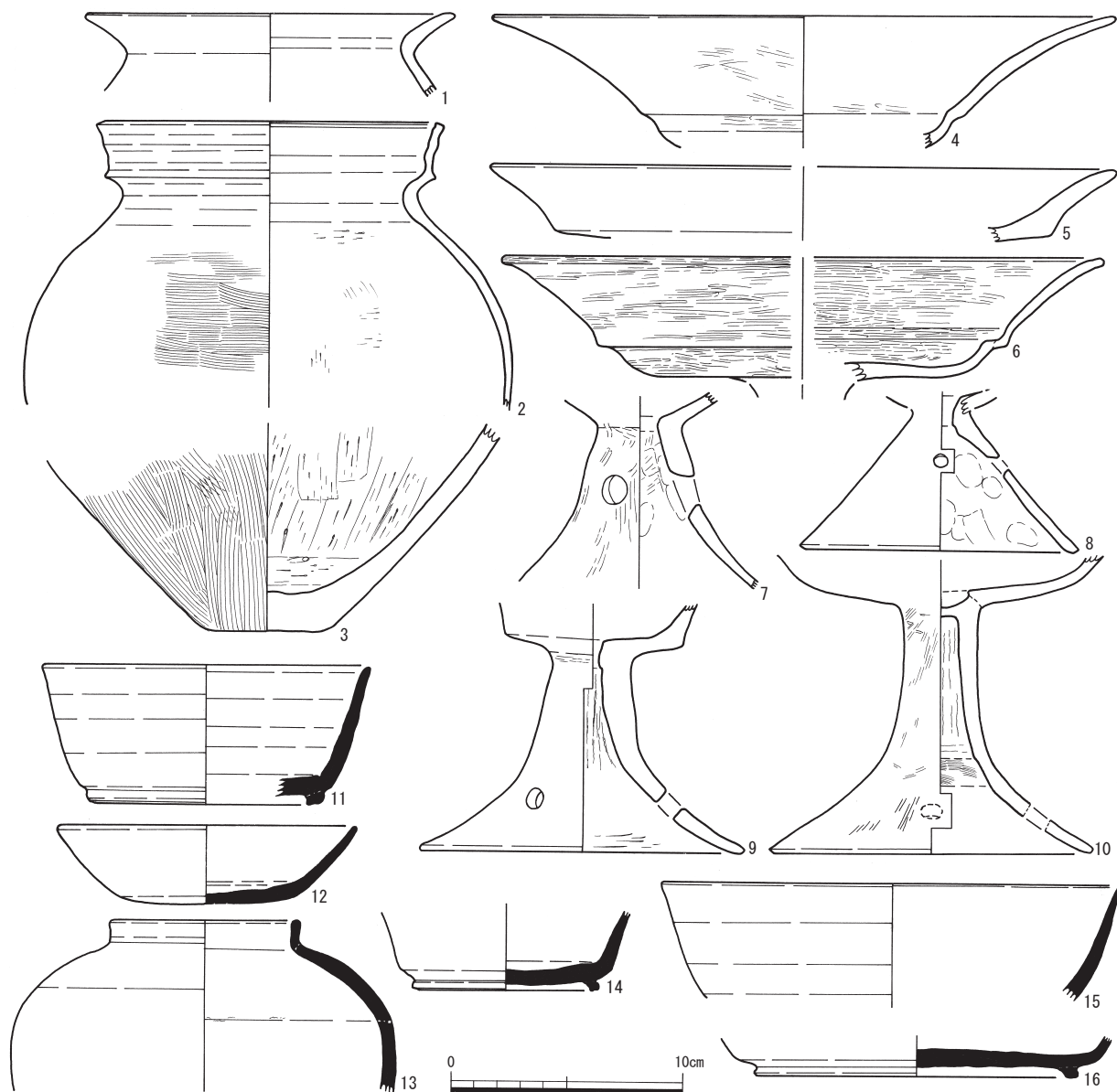
第6図3は第5図18・22と同形状の底部だが、この時期の甕の底部としてはかなり器壁が厚いことから、胴部への立ち上がりが早く、胴が長めの器形となる壺の底部と判断する。

鉢(第5図11・20) 器高が口径よりも高く、小型の甕にも分類できるような有段口縁鉢である。この種の鉢は口縁内面の有段が不明瞭で、頸部の屈曲が弱く、外形から有段であることのみが知れる。なお、この時期を代表する砲弾型の器形の有孔鉢は確認できなかった。

高坏・器台(第6図4～10) 4・6は外反する坏部口縁で、丸みのある底部から屈曲して口縁が大きく開く坏部となるものである。4は口縁部の伸びがより大きく、6はその半分程度である。前者は甕などと併行する時期になると、口縁と比較して坏部の底が小さくなり、そのためか4のように口縁の開



第5図 土器実測図(1) (縮尺1/3)



第6図 土器実測図(2) (縮尺1/3)

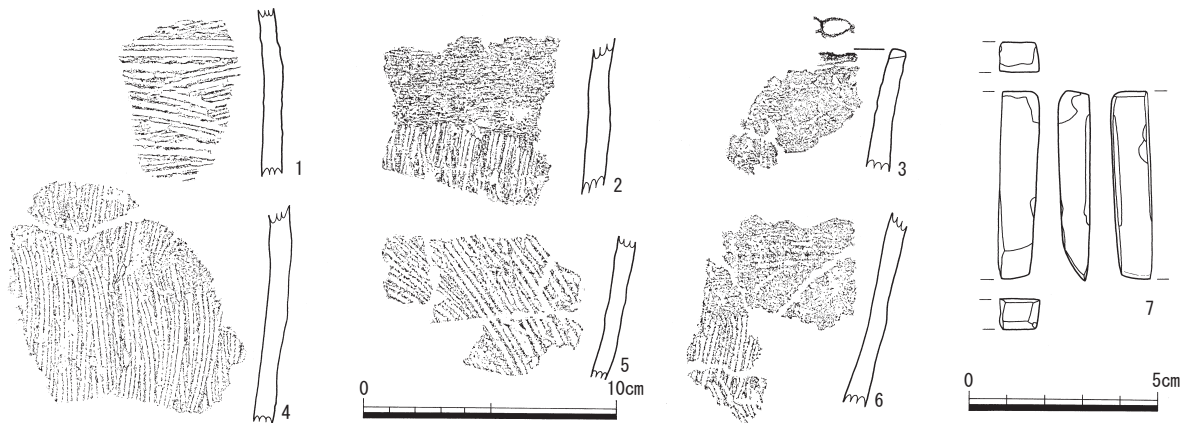
きが大きく見えるものが多くなり、6のように底が大きく、口縁の開きもまだ短いものは古く見える。5は受部の底がほとんど残存しない口縁部付近のみの破片で、同時期の高坏としてはやや厚手なことから、器台または二重口縁壺の可能性もある。

10は柱状に伸びた筒部からハの字に端部へ開く高坏の脚部である。坏部から丸みのある底部が残存し、口縁が大きく伸びて外反する受部である4と接合する可能性が高い。7～9は器台の脚部で、受部と脚部の間に孔が開くものである。7は接合部からそのままハの字状に開く脚部で、高坏や器台の脚としては一般的なものである。9は平らな坏底部から直立して立ち上がるもので、口縁が大きく開くと推測する。装飾器台でも後出の部類か、もしくは結合器台と呼ばれるものの可能性が高い。8は受部の屈曲からそのままハの字に開いて端部となる正三角形の脚部で、小さな受部が付くものと考えられる。

蓋(第5図19) 1点のみ確認した。本資料中、唯一完形に復元し得た資料である。

2) 須恵器

6点を図示した(第6図11～16)。



第7図 土器・石器実測図（1～6：縮尺1/3、7：縮尺1/2）

坏（第6図11・12・14～16） 高台が付かない「坏A」と、高台が付く高台坏の「坏B」の2種類があり、前者の「坏A」は12のみである。15は口縁部のみだが、口縁などの形状から高台が付く「坏B」と考える。

短頸壺（第6図13） 丸みのある胴部に小さな口縁が直立する。本来は宝珠の摘みが付く蓋を伴うものとする。

3) 縄文土器

6点を図示した（第7図1～6）。3のみ口縁部破片で、その他はすべて胴部破片である。3は口縁端部に上から刻目を加えるものである。

2 石器

片刃石斧（第7図7） B3区包含層より出土した。縦方向に破損しており、本来は扁平な形状を呈していたと推測する。全長5.0cm、最大幅1.1cm、厚さ0.8cm、重さ9.39gをそれぞれ測る。石材は片岩である。全体に定形的な形状と明瞭かつ鋭角な稜線を有し、刃部はじめ各部を研磨で緻密に作出している。破損面にも若干の研磨痕が見られるが、形状の整形までは至っていない。

この種の石器は弥生時代前期から中期末にかけて盛行し、刃部を繰り返し研ぎ直して使用したものと推定される。また、破損面の研磨については、破損石器の再利用あるいは再生を意図した可能性も指摘できる。

註

- 1 福井市今市遺跡（赤澤編2008）、永平寺町東古市縄手遺跡（白川編2007）、坂井市高柳・下安田遺跡（赤澤編2010）、同市上安田向田遺跡（赤澤2008）の各資料など。
- 2 永平寺町袖高林古墳群（御嶽編1999）、坂井市上安田向田遺跡（赤澤2008）など。

参考文献

- 赤澤徳明 編『今市岩畑遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第34集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008年
 赤澤徳明『上安田向田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第103集 同 2008年
 赤澤徳明 編『高柳・下安田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第112集 同 2010年
 白川綾 編『東古市縄手遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第94集 同 2007年
 御嶽貞義 編『袖高林古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告第46集 同 1999年

第3節 遺物

第1表 土器観察表

※法量の単位はcm、推定値、残量は()で示す。胎土の凡例は以下のとおりである。

①微砂粒(径1mm以下)を少量含む ②微砂粒を多く含む ③砂粒(1-2mm)を少量含む ④砂粒を多く含む ⑤大き目の砂粒(2mm以上)を含む

掘出No	遺構名	列	種類	器種	口径	器高	底径	残存率	調整・技法	色調	焼成	胎土	備考
5 1	包含層	B3	弥生土器	甕	(31.6)	(12.3)	—	3/12	外)縦凹線17本 頸部:ヨコナデ 体部:タテハケ ヨコハケ 内)口縁~頸部:ハケのちナデ 頸部以下:ケズリ	外)灰黄褐色 内)にふい黄橙色	良	①③	外面煤付着
5 2	包含層	B3	弥生土器	甕	(35.6)	(5.4)	—	2/12	外)縦凹線9本 頸部:ヨコナデ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 頸部以下:摩滅	外)灰黄褐色 内)にふい黄橙色	良	②③	外面煤付着
5 3	落ち込み西岸	B5	弥生土器	甕	(20.0)	(9.0)	—	3/12	外)縦凹線9本 頸部:ヨコナデ 体部:タテハケ ヨコハケ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 頸部:ヨコハケ 頸部以下:ケズリ	外)灰黄褐色 内)灰色	良	①③	外面煤付着
5 4	包含層	B3	弥生土器	甕	(20.0)	(6.4)	—	5/12	外)縦凹線10本 頸部:ヨコナデ 体部:ナメハケ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 頸部以下:ケズリ	外内)浅黄色	良	①	外面煤付着
5 5	包含層	B3	弥生土器	甕	(17.0)	(4.5)	—	4/12	外)縦凹線10本 頸部:ヨコナデ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 頸部:ヨコハケ 摩滅	外)にふい橙色 内)にふい黄橙色	良	①⑤	外面煤付着
5 6	包含層	B4	弥生土器	甕	(15.8)	(4.0)	—	8/12	外)縦凹線7本 頸部:摩滅 内)摩滅	外)淡黄色 内)にふい黄橙色	良	①	外面煤付着
5 7	落ち込み西岸	B3	弥生土器	甕	(14.8)	(5.1)	—	1/12	外)縦凹線6本 頸部:ヨコナデ 体部:ナメハケ 内)口~頸部:ヨコナデのち指頭痕 頸部:ヨコハケ 頸部以下:ケズリ	外内)灰黄色	良	①③	外面煤付着
5 8	落ち込み東岸	B12	弥生土器	甕	(16.0)	(6.7)	—	2/12	外)縦凹線7本以上 頸部:ヨコナデ 体部:ナメハケ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 頸部以下:ケズリ	外)灰黄色 内)暗灰色	良	①	
5 9	包含層	B16	弥生土器	甕	(17.8)	(6.5)	—	3/12	外)縦凹線7本 頸部:ヨコナデ 体部:わずかにハケ残る 摩滅 内)口縁~頸部:ヨコナデのち指頭痕 頸部以下:ケズリ	外内)にふい黄橙色	良	①③	外面煤付着
5 10	落ち込み西岸	B4	弥生土器	壺	(13.8)	(4.9)	—	1/12	外)縦凹線9本 頸部:ヨコナデ 内)口~頸部:ヨコナデのち指頭痕 頸部:ヨコハケ 頸部以下:ケズリ	外内)灰黄褐色	良	①③	外面煤付着
5 11	包含層	B8	弥生土器	鉢? 小型甕?	(11.2)	(5.1)	—	5/12	外)摩滅 内)摩滅 頸部以下:ケズリ	外内)にふい橙色	良	①③	表面被熱劣化
5 12	落ち込み西岸	B10	弥生土器	短頸壺	(10.4)	(5.6)	—	2/12	外内)剥落	外)灰黄色 内)にふい黄色	やや不良	①③	外面煤付着 被熱劣化
5 13	落ち込み西岸	B12	弥生土器	甕	(20.8)	(6.8)	—	1/12	外)縦凹線7本 頸部:ヨコナデ 体部:ナメハケ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 頸部:ヨコハケのちナデ 頸部以下:ケズリ	外)にふい黄褐色 内)淡黄色	良	①⑤	外面煤付着
5 14	落ち込み西岸	B14	弥生土器	甕	(19.8)	(7.2)	—	3/12	外)縦凹線7本 頸部:ヨコナデ 体部:タテハケ 内)口~頸部:ヨコナデのち指頭痕 頸部:ヨコハケ 頸部以下:ケズリ	外内)にふい黄褐色	良	①	外面煤付着
5 15	包含層	B3	弥生土器	甕	(16.8)	(7.8)	—	1/12以下	外)縦凹線10本 頸部:ヨコナデ 体部:ハケ 内)口~頸部:ヨコナデのち指頭痕 頸部:ヨコハケ 頸部以下:ケズリ	外内)にふい黄褐色	やや不良	③	外面煤付着
5 16	包含層	B6	弥生土器	壺	(17.2)	(6.2)	—	2/12	外)縦凹線7本以上 摩滅 内)口縁~頸部:ヨコナデ 頸部:摩滅 頸部以下:ケズリ	外内)灰黄色	良	②③	
5 17	落ち込み西岸	B9	弥生土器	脚台	—	(4.6)	(9.6)	(底)1/12以下	外)タテミガキ 摩滅 内)ミガキ?ナデ? 脚台:ナデ ヨコハケ 摩滅	外)浅黄色 内)淡黄色	やや不良	①	
5 18	落ち込み西岸	B6	弥生土器	甕 底部	—	(3.8)	2.3	(底)12/12	外)タテハケ ケズリ 内)ケズリ	外)にふい黄色 内)灰黄色	良	①	外面煤付着
5 19	落ち込み東岸	B10	弥生土器	蓋	(12.8)	5.6	(3.2)	1/12以下	外)ナデ 摩滅 内)摩滅	外内)灰白色	良	①③	
5 20	落ち込み東岸	B11	弥生土器	鉢? 小型甕?	(12.4)	(9.5)	—	7/12	外内)剥落	外内)にふい赤褐色	良	①③	表面被熱劣化
5 21	包含層	B3	弥生土器	甕	(29.2)	(4.3)	—	1/21	外)摩滅 内)ナデ	外)にふい橙色 内)にふい黄褐色	良	②	外面煤付着 山陰系
5 22	落ち込み西岸	B7	弥生土器	甕 底部	—	(9.2)	3.6	(底)12/12	外)体部:タテハケ ヨコハケ 底部:ナデ 内)ケズリ	外内)灰黄褐色	良	①	外面黒斑
6 1	包含層	B15	弥生土器	甕	(16.0)	(3.3)	—	1/12	外内)摩滅	外内)灰白色	やや不良	①	
6 2	包含層	B3	弥生土器	甕	(14.4)	(12.3)	—	3/12	外)口縁~頸部:ヨコナデ 体部:ヨコハケ 内)口縁~頸部:ヨコナデ 頸部:摩滅 頸部以下:ケズリ	外)灰黄色 内)灰黄褐色	良	①	内外面煤付着 山陰系
6 3	落ち込み西岸	B8	弥生土器	底部	—	(9.0)	(5.0)	(底)12/12	外)体部:タテハケ 底部:ナデ 内)ケズリ	外内)灰黄褐色	良	①③⑤	
6 4	落ち込み東岸	B8	弥生土器	高杯	(26.8)	(5.7)	—	4/12	外内)ミガキ	外内)明赤色	良	①③	赤彩か 第6図10と同一個体か
6 5	包含層	B3	弥生土器	高杯	(26.6)	(3.1)	—	1/12以下	外内)摩滅	外内)橙色	良	①	
6 6	落ち込み西岸	B11	弥生土器	高杯	(25.8)	(5.3)	—	4/12	外内)ヨコミガキ	外内)にふい黄色	良	①	
6 7	落ち込み西岸	B13	弥生土器	器台	—	(8.5)	—	—	外)基部以上:摩滅 脚部:タテミガキ 内)基部以上:摩滅 脚上部:ナデ 指押さえ 脚下部:磨滅	外)にふい橙色 内)灰黄褐色	良	①	外面煤付着 3孔
6 8	包含層	B3	弥生土器	器台	—	(6.9)	(12.0)	(底)3/12	外)剥離 内)脚部:指押え ナデ 剥離	外内)灰黄褐色	良	①	内外面被熱劣化か 1孔有
6 9	包含層	B6	弥生土器	器台	—	(10.7)	(13.6)	(底)6/12	外)摩滅 基部:ヨコミガキ 内)摩滅 脚上部:しぼり痕 脚下部:ケズリ	外内)にふい橙色	良	①	3孔
6 10	落ち込み東岸	B9	弥生土器	高杯	—	(12.8)	(13.6)	4/12	外)坏部:摩滅 脚部:タテミガキ 内)坏部:摩滅 脚部:しぼり痕 ヨコナデ 細かいヨコハケ 摩滅	外)赤褐色 内)明赤褐色	良	①	赤彩か 孔数不明 第6図4と同一個体か
6 11	包含層		須恵器	坏B	(14.0)	6.0	(8.8)	1/12以下	外)回転ナデ 底部:回転ヘラ切り後貼付 内)回転ナデ	外内)灰白色	良	①③	外面自然釉
6 12	包含層		須恵器	坏A	(13.0)	3.4	(7.6)	2/12	外内)摩滅	外内)灰白色	不良	①	生焼け
6 13	包含層	B3	須恵器	短頸壺	(7.8)	(7.4)	—	1/12	外内)回転ナデ	外内)灰白色	良	①③⑤	外面自然釉
6 14	包含層		須恵器	坏B	—	(3.5)	(7.4)	(底)6/12	外)回転ナデ 底部:回転ヘラ切り後貼付 内)回転ナデ	外内)灰白色	良	①⑤	
6 15	表採		須恵器	坏B	(20.0)	(5.0)	—	1/12	外内)回転ナデ	外内)灰色	良	①③	
6 16	排土		須恵器	坏B	—	(1.8)	(13.8)	(底)4/12	外)回転ナデ 底部:回転ヘラ切り後貼付 内)回転ナデ	外内)灰色	良	①③⑤	
7 1	包含層	B3	縄文土器	深鉢	—	(6.6)	—	—	外)条痕 内)ナデ	外内)にふい黄褐色	良	⑤	外面煤吸着
7 2	包含層	B2	縄文土器	深鉢	—	(6.3)	—	—	外)条痕後ナデ 内)ナデ	外)にふい黄褐色 内)灰白色	良	⑤	第7図3・6同一個体
7 3	包含層	B3	縄文土器	深鉢	—	(4.9)	—	—	外)口端キザミ 条痕後ナデ 内)ナデ	外)にふい黄褐色 内)灰白色	良	⑤	第7図2・6同一個体
7 4	包含層	B2	縄文土器	深鉢	—	(8.7)	—	—	外)条痕 内)ナデ	外)にふい黄褐色 内)灰白色	良	⑤	
7 5	包含層	B2	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	—	外)条痕(二枚貝) 内)ナデ	外)灰白色 内)にふい黄褐色	良	⑤	煤吸着
7 6	包含層	B2	縄文土器	深鉢	—	(7.7)	—	—	外)条痕後ナデ 内)ナデ	外)にふい黄褐色 内)灰白色	良	⑤	第7図2・3同一個体

第4章 まとめ

今回検出した落ち込み地形は朝六川すなわち旧浅水川水系に連なる旧河川か、もしくは湿沼地であり、これ以外の遺構を一切検出しなかったことから、調査区は弥生時代終末期から古墳時代初頭を主体時期とする集落の縁辺部と判断する。

過去の分布調査⁽¹⁾によれば、杉谷遺跡は杉谷集落北側の山裾と集落南端部で縄文土器を、集落中ほどの山裾で土師器を、水田部で土師器・須恵器を各々採集しており、各所に各時代集落が展開すると推定されている。調査区は杉谷集落から南東に離れた水田部に位置し、集落南端部にもほど近い。その意味でも、今回の成果は過去の分布調査結果に合致していると言える。

落ち込みの両岸にのみ遺物が集中し、特に西岸部で多量の土器や炭化物が局地的に出土した状況は、他所からの流入ではなく、意図的な廃棄行動を示唆するものと考えられる。すなわち、調査区のごく近隣、おそらくは西方に集落が展開し、煮炊き等で劣化・破損して不要になった土器を、炭などの残滓とともに廃棄した状況が推測できる。

今回の調査は小規模であり、遺跡の全体像を俯瞰するには到底及ばない。しかし、遺跡の存在が周知されて久しいものの、その実態をほとんど知り得なかった杉谷遺跡の一隅を照らしたという点で、今回の調査成果は相応の意義を持つと確信する。

註

- 1 福井大学考古学研究会や福井市史編さん室による（福井大学考古学研究会編1981、南1990）。これらの分布調査以前にも縄文土器資料が紹介される（青木1976）など、杉谷遺跡はその内容から一般に縄文時代遺跡としての知名度が高い。

参考文献

- 青木豊昭「第I章第2節2. 歴史的環境」『安保山古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告第1集 福井県教育委員会 1976年
福井大学考古学研究会 編「杉谷遺跡」『福井市分布調査概報遺物編（表採資料）』福井市教育委員会 1981年
南洋一郎「38 杉谷遺跡」『福井県史 資料編13 考古』福井県 1986年
南洋一郎「杉谷遺跡」『福井市史 資料編1 考古』福井市 1990年

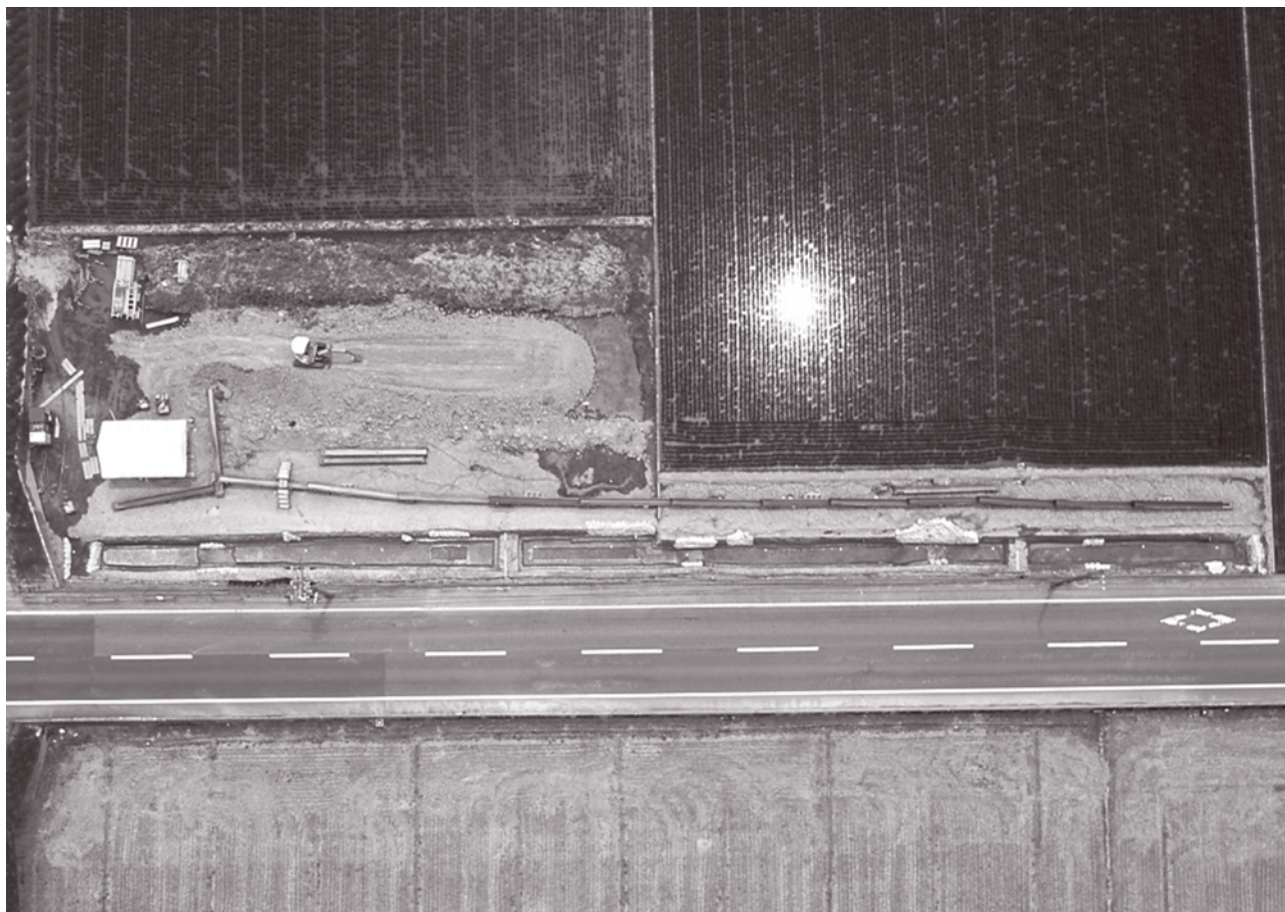
写 真 图 版



(1) 調査区遠景 (西より)



(2) 調査区遠景 (東より)



(1) 調査区全景 (北より)



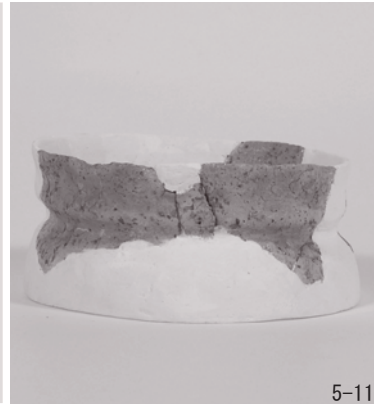
(2) 落ち込み東岸 (北より)



(3) 落ち込み西岸 (北より)



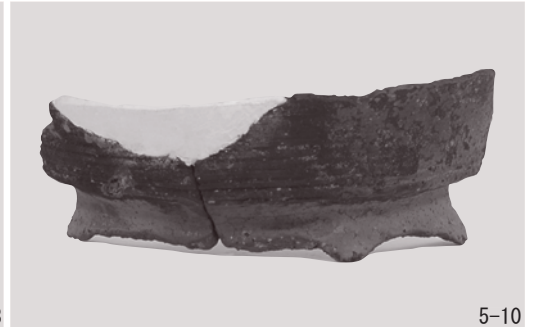
5-1



5-11



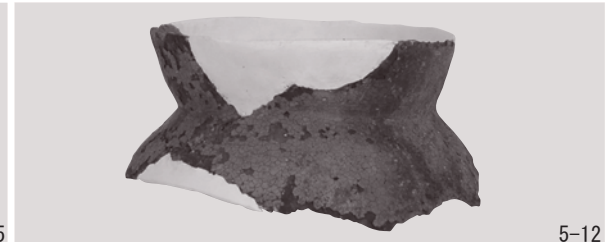
5-3



5-10



5-5



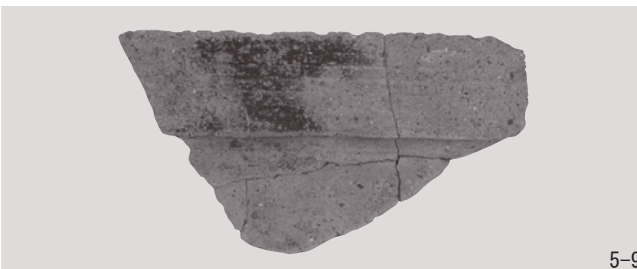
5-12



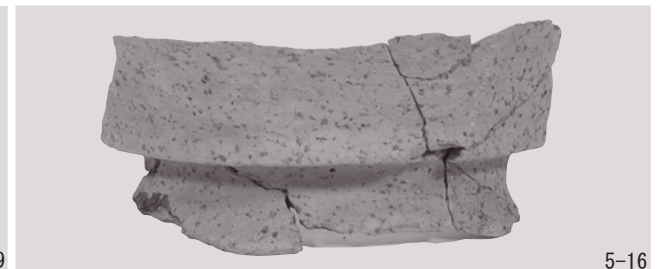
5-6



5-14



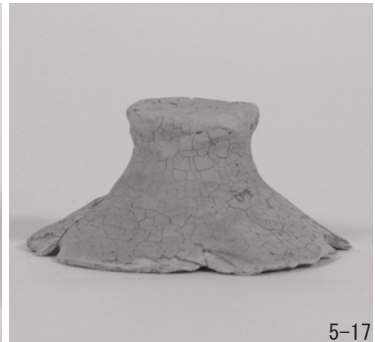
5-9



5-16



5-20

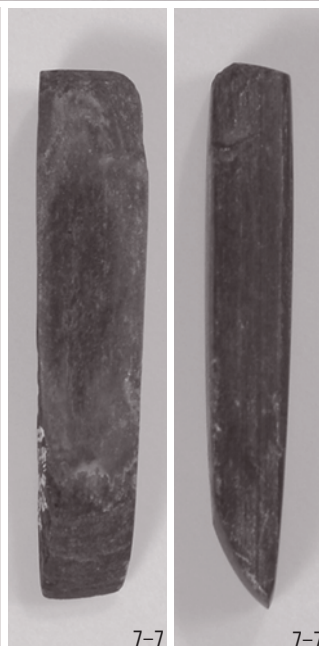
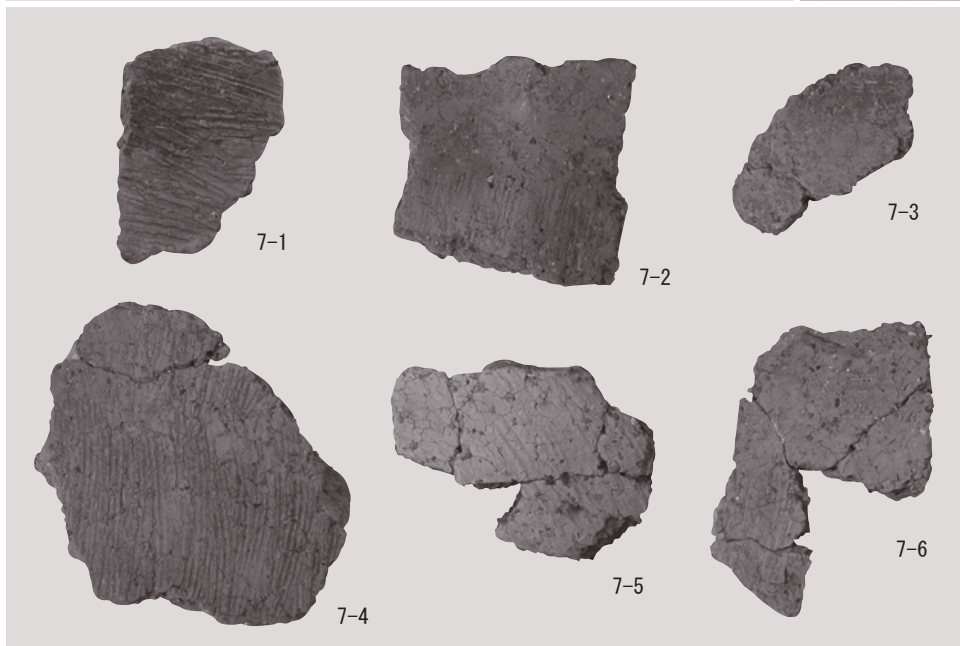


5-17



5-19

図版第四 遺物（土器・石器）



報 告 書 抄 録

ふりがな	すぎたにいせき							
書 名	杉谷遺跡							
副 書 名	一般県道清水麻生津線（県単）道路改良工事に伴う調査							
巻 次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第162集							
編 著 者 名	中森敏晴 赤澤徳明							
編 集 機 関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所 在 地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2016年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すぎたにいせき 杉谷遺跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 すぎたにちょう 杉谷町	18201	01172	36° 00′ 58″	136° 11′ 51″	20130501 ～ 20130630	270㎡	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
杉谷遺跡	集落	弥生時代末 ～ 古墳初頭	落ち込み地形	縄文土器 古式土師器 須恵器				
要 約	<p>杉谷遺跡は過去の分布調査で縄文土器・土師器・須恵器・中世陶器などが採集され、当該各時代集落の存在が推測される遺跡である。今回の調査で検出した落ち込み地形は旧浅水川水系に連なる旧河川もしくは湿沼地であり、他に遺構がないことから、調査区は集落の縁辺部と判断する。出土遺物は弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての古式土師器が主で、遺跡の主体時期も同様の時期と考える。遺物が落ち込みの両岸のみに集中し、特に西岸部で多量の土器と炭化物が局地的に出土したが、これは調査区西方の集落で劣化・破損した土器を、炭などの残滓とともに当地へ廃棄したものと推測する。</p> <p>今回の成果は過去の分布調査の成果と範囲を実際に裏付けるものとなった。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第162集

杉谷遺跡

— 一般県道清水麻生津線（県単）道路改良工事に伴う調査 —

平成28年3月10日 印刷

平成28年3月22日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10
印刷 白崎印刷株式会社
〒910-0843 福井県福井市西開発3-715
